

# 伝わる楽しさを実感し、 英語によるコミュニケーションへの意欲を高める授業づくり —小学校中学年における外国語活動の指導法の工夫—

田中 絢乃

帝京大学大学院教職研究科 教職実践高度化コース

キーワード：外国語活動 コミュニケーション 意欲

## I 研究主題設定の理由

### 1 研究の動機

小学校学習指導要領（平成 29 年告示）により、新たな目標のもとに、中学年の外国語活動が始まった。本格的に英語学習を始める中学年児童にとって、伝わる楽しさを実感することは、その後の学ぶ意欲を高めることにつながると考える。これまで日本では、長期にわたり英語を学んでも、実際に使うことができなかったり、学ぶことを諦めたりする実態があった。

そこで、本研究では、少ない単語でも伝わったという楽しさを実感し、英語によるコミュニケーションへの意欲を持ち続けて欲しいと考え、主題を設定した。

### 2 研究の目的

小学校中学年の外国語活動において、伝わる喜びの得られる外国語活動の指導法の究明を目的とした。

### 3 研究の仮説

相手、目的、意図、場面、状況等の要素を明確にし、実生活に即した言語活動を中心にした授業を工夫し、英語で話せたことを教師や子供同士が認め褒めることにより、児童は、伝わる楽しさを実感し、英語によるコミュニケーションへの意欲を高めるであろう。

## II 研究方法・内容

### 1 文献研究

「英語が使える日本人の育成のための戦略構想」には、日本の英語教育を抜本的に改善し、実生活で使える英語教育への具体策が示された。文献研究では、こうした日本の動向を学ぶとともに、Can-Do リストや評価について学びを深めた。外国語活動の評価方法として、活動の観察や自己評価、発表や作品などのパフォーマンス

評価など、多面的、多角的に評価をすること、外国語活動では数値ではなく文章の記述による評価を行うこと、また、指導と評価を一体化させ、「カリキュラム・マネジメント」や「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善」を行うことが重要であることが分かった。さらに、文献研究から、学習過程における「Activity」が、単に教室内の練習ではなく、現実の社会をイメージして行うものでなくてはならないことが分かり、指導に生かすことにした。本研究では、児童の頑張りや可能性を見取り、個に応じた支援を工夫するとともに、指導の有効性を検証する。

### 2 調査研究

#### (1) 調査目的

外国語活動の指導上の工夫や課題を把握するため次の聞き取り調査を実施した。

#### (2) 調査対象・時期

①教職 7 年目の学級担任 調査時期：2020 年 5 月

②経験 7 年目の ALT 調査時期：2020 年 11 月  
〈考察〉

聞き取り調査から、授業では、会話の相手、目的、場面等を具体的に設定すること、児童が英語を話した時に、表情豊かに褒めて認めることが重要であること、「伝わった」ということを教師側から積極的に伝えること、相づちやジェスチャーを交えながら会話すること、教師がしつかりとほめることが重要であることが分かった。教師は、自分が思っている以上にほめることにより、児童は次も話したい、もっと伝えたいという意欲を高めることが大切だと分かった。

## III 実践研究

### 1 授業研究の内容

単元名 Let's Try 2 Unit7 What do you

want?

○実施日時 2020年11月4日13:25～35分授業

○授業の概要 オリジナルピザの食材を買い手と売り手になって英語で対話する。

○指導の工夫 研究仮説をもとに、ピザや食材カードを作り、市場で買い物をする場の設定をした。

○観察対象児の特性と支援

- ・A児：理解力も、発言力もある子⇒質の高い豊かなコミュニケーションへ導く工夫
- ・B児：理解しているが自信がなく、発言をためらいがちの子⇒ペアの組み方の工夫
- ・C児：理解が遅れがちで発言が少ない子⇒事前調査をもとに、発話のきっかけとして支援する。英語を言えた時に、承認し、ほめる。

## 2 授業実践をして明らかになったこと

(1) 児童が英語で話した時に、大きく相槌をうち、児童の発言を繰り返しながら自然な会話につながった。その結果、活発に手を挙げて発表する姿や、ペアワークで児童同士の会話も活発に行われた。

(2) 児童が英語を話した時にしっかりと褒めるようにした。全体指導や机間指導で実践した。その結果、褒められた児童は、マスク越しでも分かるほど笑顔を見せ、その後、大きな声で自信をもってコミュニケーションをとるようになった。なかなか声を出せなかった児童も、ペアの児童と英語で会話できるようになった。

(3) A児は、活動が進んでいくにつれて慣れが出てきてしまい、カードが欲しいという思いから効率を優先し、コミュニケーションが疎かになってしまった。より質の高いコミュニケーション力を身に付けるための支援が必要である。

## IV 研究の成果と課題

### 1 研究の成果

(1) 研究仮説に基づく知見が得られたこと

仮説に基づく授業を実施したことにより、以下の知見が得られた。

〈相手・目的〉コミュニケーションとは、情報の送り手と受け手が、相互に情報のやり取りをすることであるが、情報の送り手は、事前に「何を」「どの程度」伝えるかを整理し、伝える場面では「聞きとりやすい速さと大きさ」で伝えるなど、基本的なことをおさえる必要がある。また、情報の受け手は、相手が安心して話せるように、「うなずく」「目を見る」など、受け止める姿勢を、

日常的に指導する必要がある。「うまく伝わらなかったらどうしよう」「正しく聞き取れなかったらどうしよう」という緊張感をほぐすため、デモンストレーションでは、送り手と受け手の留意点をしっかりと教える必要があると考える。

〈場面・状況〉コミュニケーションでは、表現が文法的に正しいだけでなく、その場面や状況に適しているかどうかを理解し、表現を選んで使用する必要がある。これが、場面や状況、相手の立場や慣習などのコンテキストに応じて適切に言語を使用する必要がある。外国語活動では、このような言語の社会文化的な側面である社会言語能力 (sociolinguistic competence) まではねらいとしてはいないが、英語を学び続けを英語力を向上させる上で重要な要素であることを踏まえる必要がある。そのため、外国語活動では、視覚的にもリアルな場面や状況を設定する必要がある。

### (2) 児童の変容

ペアワークの工夫、達成感を得られる場面の設定、事前アンケート、児童の発言に対する相槌や称賛、などにより、「振り返りシート」には、児童全員が、楽しかった、よく分かったと書いていた。また、観察対象児とした児童は、それぞれの学び方や特性に応じた支援があれば、自ら学んでいくことが分かった。

### (3) 教師の変容

研究を通して、自信をもって授業することが出来るようになった。個と全体に目を向けることが出来るようになった。外国語活動はもちろんのこと他の教科でも応用できる授業力を身に付けることができた。

## 2 今後の課題

ペアワークの際、はじめはペアとアイコンタクトをとり「Thank you.」と笑顔で話す児童が、活動の後半は慣れが出てしまい、目的が曖昧になる姿が見られた。理解が遅れている児童への支援の必要性はもちろん、理解が進んでいる児童に対して、発展的な課題や既習事項を応用発展させるなどの支援を検討する。

### 【主な引用文献】

- 1) 文部科学省「英語が使える日本人の育成のための戦略構想」平成14年
- 2) 文部科学省「小学校学習指導要領」平成29年告示